

<めでたし>雑木林の径の脇にオケラとコウヤボウキの花が咲いています。二つとも少しカールした白い菊のような花であり区別が付きません。ただよく見ると葉の付き方が異なるのとオケラの総苞(花の下の膨らんだ部分)は太くて魚の骨がまとわりついたような姿をしているので分かります。ところで両方とも何となく“めでたい”植物です。



オケラの根茎は生薬の白朮(ビャクジュツ)になり元日の“おけら詣り”の火種に使われます。コウヤボウキの方も、名の通り箒(ほうき)になるのですが、大事な役割があって大昔の宮中では初子(はつね：正月明け最初の子(ね)の日)に行う蚕室の掃除に使ったようです。

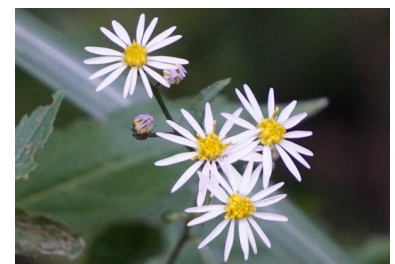


(おけら詣り)1年間の無病息災を願い八坂神社(京都)の白朮祭(おけら祭)の火を竹縄に移して自宅に持ち帰ります。白朮はお屠蘇の材料にも使われます。

<上：オケラ、下：コウヤボウキ>

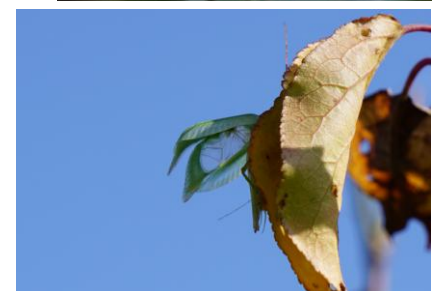


<ジェンダー>盛りを過ぎましたが林の縁辺にはオトコエシ(男郎花)が咲いています。名前から思い浮かぶのはオミナエシ(女郎花)ですね。オトコエシはオミナエシに比べ花の形は似ていますが草の姿が猛々しいのでこの名がついたとのこと。オミナエシの名は小さな黄色の花が粟飯を想わせ、これは女性のご飯、“女飯”からと言うのが一説です。そうするとオトコエシは“男飯”、白いご飯、差別ですね。ところがオトコエシと違ってオミナエシは万葉の昔から歌にも詠まれ



<上：オトコエシ、下：オミナエシ>源氏物語にもいろいろと登場し大いに“人権?”を得ています。「ほど近き法の御山をたのみたる女郎花かと見ゆるなりけれ」、与謝野晶子の歌です。ヨメナの花は真っ盛りで、これは花が美しいから“嫁菜”となったという説があり、若葉は食用になります。

<右上：ヨメナ、右：アオマツムシ>



<メルヘン>草むらや植え込みのあちこちからアオマツムシの“リーリーリー”と鳴く声が昼下りによく聞こえます。翅を広げて虫の鳴く姿は薄い緑の羽衣をまとっているようです。一方、朽ちた枯れ葉や小枝の落ちている林では可愛らしいキノコが沢山見られます。名前は分かりませんが写真のキノコも童話に出てきそうですね。(文と写真：松本正勝)